

「次代を担う若者を鍛える」

東日本大震災から5年の節目の年であった昨年は、予想もつかない出来事が枚挙にいとまがないほど次々に発生した。欧州では英国の欧州連合（EU）離脱が国民投票で決定し、米国ではトランプ政権が発足を運びとなった。国内に目を転じてみると、マイナス金利政策の発動やAIの急激な進展、そして、何より熊本地震や台風10号など自然の猛威にさらされ、本県も大規模な被害に見舞われた。日本を取り巻く様々な環境が不透明さを増していることは間違いない。

経営環境が不透明さ、不確実さを増す中で迎える2017年をどのように舵取りをし、企業の成長に結び付けていくべきか、経営者にとって油断のならない、本気度が問われる新年を迎えている。

ここで注意しておかなければならないのは、不透明さ・不確実性といった言葉で多くを理解したような錯覚に陥って、身がすくんでしまい、元気をなくしてしまうことであろう。むしろ、漫然と悩まず自分の足元を見つめなおし、現状で取りうるオプションを考え、行動に移していくことが求

められる。変化にしり込みせず山積する課題に果敢に挑戦し、成長機会に変えていくことができるかどうか、今後を左右する大きな1年になると捉えていきたい。

新たな世界の実状、テクノロジーの進化を踏まえ、革命期とも称されるような急激な変化を乗り切ろうとするとき、促進しなければならぬものは何か。不測の備えとして資金や設備も当然必要だが、決定的に大切になるのが人材育成と考えている。特にも、これからの担う若者を鍛えることだ。責任を与える、難しい仕事を任せる、助言をし、時には叱る。こういった中で将来組織のリーダーとなって牽引する人材を育てていくことだと思ふ。同時に、若者の発想と行動を生かせる組織にどう変えていくかという点にも目を向きたい。

岩手銀行では6年前の震災直後に、「いわぎん次世代経営塾」を開始した。この経営塾は、お取引先の後継者育成をサポートする会である。1年間、経営の本質とスキルを体得してもらおうほか、会員相互のネットワークづくりや人間力の向上も狙いとした。さらに、社業の発展はもろろ地域経

済の担い手として、その活性化にも積極的に取り組む経営者になってほしいとの思いも込めた。

経営塾の内容はここでは割愛するが、1年間を締めくくる修了式で、各自策定したアクションプランを現経営者の居並ぶ前で発表する。1年間鍛え抜かれた彼らの姿には、想像を上回る成長の跡が感じられ、頼もしさすら覚える。すでに5期が経過し、卒業者は110名を超える。優れた経営者になる道は容易ではないが、育つための土壌と肥料になってくれるだろうと期待している。あとは、自ら考え、行動していくなかでこそ経営の核心がつかめる。

卒業者の中には、すでに新しい事業にチャレンジし、新製品の調味料の発売に結びつけた者も現れている。これから、もちろん失敗もするだろう。だが、人間は失敗も含め体験を積むことで成長していく。今後、企業経営が様々な荒波に見舞われるのは必至である。この荒波に敢然と漕ぎ出し、失敗を恐れず挑戦を続けていく適格者こそ若手経営者であり、若手リーダーだと信じてやまない。



一般財団法人岩手経済研究所
理事長
(岩手銀行 会長)

高橋 真裕